

「天気」の仕様の変更について

「天気」編集委員会では、編集委員会での議論、常任理事会での承認を経て、日本気象学会創立125周年に当たる2007年から、その仕様に関するいくつかの変更を行なうことにいたしました。以下にご説明しますように、この仕様の変更は、コストの削減を実現しつつも印刷の質の向上を図るものと期待され、また「大気」を扱う学会として環境へも配慮したものになっています。

変更の第1点は、使用する用紙の変更です。従来の「天気」は、普通ページは上質紙、カラーページはコート紙、青ページは色上質紙（中厚口）浅黄を用いてきました。「天気」で用いている B5判の印刷の場合、印刷・製本コストを最も安くあげられるのは、片面 8 ページ・裏表で16ページをまとめて印刷・製本できるようにすることです。例えば、ある号が全部で80ページのときには、これを16ページ×5に分けて、印刷製本できれば最も経済的です。しかしながら、従来の用紙の使い方では、例えば16ページの論文にカラーの図が1ページあると、上質紙14ページ、コート紙2ページに分けて印刷する必要がありました。印刷機は最小でも B3判（B5判の4倍）の大きさなので、上質紙14ページの部分も8ページ、4ページ、2ページに分けて印刷・製本する必要があります。これにより、16ページまとめて印刷・製本すれば1回の手間ですむのに、カラーが1ページあるために印刷・製本の手間が4倍になり、コストもかかっていたというわけです。

この問題を解決するため、2007年からは「天気」のすべてのページを従来の上質紙と同じ厚さのマット紙に変更することにいたしました。マット紙は普通紙よりは若干高価ですが、上記の印刷・製本にかかる余分なコストに比べると問題ではありません。マット紙は基本的にコート紙同様にカラー印刷に適している一方、コート紙ほどは光沢が無いので、従来の本文と比しても違和感は少ないと思われま。全ページマット紙にすることにより、論文中のカラー図をどのページに割り付けるかに関する自由度は従来より増すことが期待できます。また、近年、論文等に多く使用されるようになった影付きの図の印刷も、普通紙に比べて見やすくなることが期待されます。更に、現在検討中ですが、本文の2色刷などへの対応も容易になると思われま。

変更の第2点は、環境に配慮した素材を用いることです。使用するマット紙は再生紙を用い、インクは大豆インクを用いることにしました。これらの変更は、経年劣化や印刷の出来には全く影響ないことを、印刷業者に確認済みです。

以上、新しい「天気」の仕様について、説明させていただきました。1月末発行の新しい「天気」を楽しみになさって下さい。今回の仕様の変更に限らず、「天気」に関するご意見・ご要望は遠慮なく「天気」編集委員会までお寄せください。